



歴史と民話

歴史と伝説

八橋(の)かきづばたは、文学上有名な恋歌の古今和歌集や伊勢物語に載っています。

平安の歌人・在原業平が、東下りの途中、この八橋にさしかかり、かきづばたの一画面に咲き乱れていますを見て【かことも・きつとなれじ】とつしまあはるるばるきぬる・たびをしおもふ】ことさんだ歌は、かきづばたの五文字を折り込んでいることで有名で、広く文人や文部省に親しまれています。

旧東海道には、元治九年(1866)の道標があります。「從是五右衛門平作御駕籠」とあるその右側には、「八橋山無量寺」と彫られています。また、西へ330mの所には、三河で唯一の哥創一對の里塙(県の指定)があり、同じく西へ1000mの所には、松並木(丁並木)の殊の弦街の中に「馬鹿之跳」と彫られた碑があります。

さらに西へ1500m進むと、江戸時代街道の宿場駅として栄えた東海道39番目の宿場町・本陣跡があり、その先には見事な橋樋門が構築した古城の跡もあります。

マシム井に有名な知立神社は、その北側の坂を下すところにあります。

片目の鰐

知立神社の御手洗池の鰐は、片目であったとい伝えられています。

その昔、長者の娘が重い病気にかかった上に、失明しそうになりました。娘の両親は大心配して、「娘の目がなおりますように」と明神さまに願かけし、来る日も来る日も心においてまいりました。

そしてむかつく湯鍋の二十一日の日、不思議などに娘の片目の目が見えるようになってしまったのです。

この時から、御手洗池の鰐は片目になったということがあります。

山車(だし)(桟棒運の心意氣)

「からこもろ…」の歌を聞いた姫は、遠く東の国へ向った業平を喜んで舟を掛け出し、八橋まで来てしましました。瀧川を渡って再会しましたが、一日達えた喜びも舟の商、業平は姫に心を残したまま八橋を旅立ってしまいました。

その悲しさと族の疲れで病気になつた姫は、村人に看病されました。業平への慕いに心満たさず、とうとうかきづばたの花咲く池に身を沈めてしまいました。

村人は、愛に生きたかきづばたの一生を哀れに思い、歌を歌って弔いました。

それが現在の無量寺の本堂裏手にある「姫塚」です。

櫻渡川

弘法大師が園東へ向かれる途中のことでした。知立辺の川には橋がなく、川岸では三匹の子猿がけんかをしていました。ところが川を渡る時になって、親猿はそんな子猿たちをけんかさせることなく上手に渡しました。

弘法大師は、困難に打ち勝ち親猿の姿を見た心感され、その川を「櫻渡川」と名づけました。

山車(だし)(桟棒運の心意氣)

山車の構造は2層で、車輪は内輪で松の大木を輪切りにしたもので、形態は知多地方の山車に似ていますが、剥離(皮剥離)金箔を施し、剥離が後方だけにあるのが特徴です。

ある年、般舟の前で車輪が壊れ、桟棒運(右側4~5人が抱き上げたまま神社まで運行しました。これがはじまりとなり現在の山車の姿になったと言われています。

街角や神社境内で力を合わせて山車を抱き、山車内のはし連に合わせて方向転換したり、参道を一部引いたまま運行、神社境内でぐるぐる廻った後、「うち・の・さん」でドンと地盤に落とすのが、桟棒運の力の見せ場です。

知立まつり

知立市最大のお祭り「知立まつり」は、毎年5月2・3日に行われています。

本祭りには豪華な「山車」が、開幕には「花車」が、市内の山・中野・本・宝・西の五町から駆け出され、町内を練り歩き、本祭りでは国指定重要無形民俗文化財の「山車文楽」「山車からくり」が、知立神社・南雲波被神社で行われます。

この祭りは、田植えが始まる頃から、マムシなどの害蟲を除けたり、人々が神社に春雨を願ったことが起りと言われています。

神主・見立氏家御祖によると、初めて山車が奉納されたのは、江戸時代承応2年(1653)の祭礼であったと記録されています。

あんまき

知立市は、江戸時代「東海道三次」の宿場町、もめん市・馬鹿市で栄えました。そんな歴史ある知立の名物といえば「あんまき」です。

明治中期、東海道を行き交う旅人の疲労を癒し、次なる旅客への活力を与えてくれたあんまきの名は、その味の良さから、短時間のうちに各地で知られるところとなりました。

「あんを巻いたもの」が由来で名付けられたあんまきですが、そのはじめは、焼き菓子の「二つ折り」を焼いていた和菓子職人が、ある時あんを入れてみたところ、大変おいしく評判が高かつたために誕生したと言われています。今時代でもその味が守りえられてきたのは、伝統を守り続ける職人の熱い想いと、いつの時代も変わらぬこの味を求めてやまなかつた庶民の支持があるこそです。

その他のお土産品であるおもとろい餅や、ふくらとした皮と優しい甘みのあんが見事にマッチしたこの名物と東子は、焼きたてはもちろん、冷めてもおいしいただくことができ、現在でも大人気。子どもさんからお年寄りまで、大変喜ばれています。

東子で囲むのこな小倉あんと白あんは、甘いものが苦手という人もおすすめ。おみやげにも最適な自慢の一品を、ぜひ一度ご賞味ください。

なぜ池鯉鮒なの?

「知立」の名前は、8世紀出土の木簡および9世紀平安時代の文献「文政文鏡」に記されています。

その「知立」「知利」「池鯉鮒」「知利府」「知利郡」などと記されています。特に「池鯉鮒」は、東海道・海が墨かれて江戸時代から使われ、東西南北の交通の要衝として沿岸地方の経済の中心地となり、大いに繁榮しました。

明治維新とともに「知立」と改められ、1200年前の字に戻りました。

安政の豪農の浮舟船でてくる「池鯉鮒」宿は、私たち知立のロマンです。

在原寺(原寺)

明治用水上部の遊歩道を利用して快速なコースです。

名鉄知立駅と三河線三河八橋駅を結ぶコースです。

電車は屋間15分間隔での便利です。

少し寄り道すれば古い町並みを見ることができます。

本陣跡① 本町本

池鯉鮒宿内には本陣は1軒、幕府の役人や公家・大名などが泊りました。

敷地299坪(約9583m²)、延坪300坪(約91m²)であったといわれています。また、西へ330mの所には、三河で唯一の哥創一對の里塙(県の指定)があり、同じく西へ1000mの所には、松並木(丁並木)の殊の弦街の中に「馬鹿之跳」と彫られた碑があります。

さらに西へ1500m進むと、江戸時代街道の宿場駅として栄えた東海道39番目の宿場町・本陣跡があり、その先には見事な橋樋門が構築した古城の跡もあります。

マシム井に有名な知立神社は、その北側の坂を下すところにあります。

片目の鰐

知立神社の御手洗池の鰐は、片目であったとい伝えられています。

その昔、長者の娘が重い病気にかかった上に、失明しそうになりました。娘の両親は大心配して、「娘の目がなおりますように」と明神さまに願かけし、来る日も来る日も心においてまいりました。

そしてむかつく湯鍋の二十一日の日、不思議などに娘の片目の目が見えるようになってしまったのです。

この時から、御手洗池の鰐は片目になったとい伝えられています。

山車(だし)(桟棒運の心意氣)

山車の構造は2層で、車輪は内輪で松の大木を輪切りにしたもので、形態は知多地方の山車に似ていますが、剥離(皮剥離)金箔を施し、剥離が後方だけにあるのが特徴です。

ある年、般舟の前で車輪が壊れ、桟棒運(右側4~5人が抱き上げたまま神社まで運行しました。これがはじまりとなり現在の山車の姿になったと言われています。

街角や神社境内で力を合わせて山車を抱き、山車内のはし連に合わせて方向転換したり、参道を一部引いたまま運行、神社境内でぐるぐる廻った後、「うち・の・さん」でドンと地盤に落とすのが、桟棒運の力の見せ場です。

知立まつり

知立市最大のお祭り「知立まつり」は、毎年5月2・3日に行われています。

本祭りには豪華な「山車」が、開幕には「花車」が、市内の山・中野・本・宝・西の五町から駆け出され、町内を練り歩き、本祭りでは国指定重要無形民俗文化財の「山車文楽」「山車からくり」が、知立神社・南雲波被神社で行われます。

この祭りは、田植えが始まる頃から、マムシなどの害蟲を除けたり、人々が神社に春雨を願ったことが起りと言われています。

神主・見立氏家御祖によると、初めて山車が奉納されたのは、江戸時代承応2年(1653)の祭礼であったと記録されています。

あんまき

知立市は、江戸時代「東海道三次」の宿場町、もめん市・馬鹿市で栄えました。そんな歴史ある知立の名物といえば「あんまき」です。

明治中期、東海道を行き交う旅人の疲労を癒し、次なる旅客への活力を与えてくれたあんまきの名は、その味の良さから、短時間のうちに各地で知られるところとなりました。

「あんを巻いたもの」が由来で名付けられたあんまきですが、そのはじめは、焼き菓子の「二つ折り」を焼いていた和菓子職人が、ある時あんを入れてみたところ、大変おいしく評判が高かつたために誕生したと言われています。今時代でもその味が守りえられてきたのは、伝統を守り続ける職人の熱い想いと、いつの時代も変わらぬこの味を求めてやまなかつた庶民の支持があるこそです。

その他のお土産品であるおもとろい餅や、ふくらとした皮と優しい甘みのあんが見事にマッチしたこの名物と東子は、焼きたてはもちろん、冷めてもおいしいただくことができ、現在でも大人気。子どもさんからお年寄りまで、大変喜ばれています。

東子で囲むのこな小倉あんと白あんは、甘いものが苦手という人もおすすめ。おみやげにも最適な自慢の一品を、ぜひ一度ご賞味ください。

なぜ池鯉鮒なの?

「知立」の名前は、8世紀出土の木簡および9世紀平安時代の文献「文政文鏡」に記されています。

その「知立」「知利」「池鯉鮒」「知利府」「知利郡」などと記されています。特に「池鯉鮒」は、東海道・海が墨かれて江戸時代から使われ、東西南北の交通の要衝として沿岸地方の経済の中心地となり、大いに繁榮しました。

明治維新とともに「知立」と改められ、1200年前の字に戻りました。

安政の豪農の浮舟船でてくる「池鯉鮒」宿は、私たち知立のロマンです。

在原寺(原寺)

明治用水上部の遊歩道を利用して快速なコースです。

名鉄知立駅と三河線三河八橋駅を結ぶコースです。

電車は屋間15分間隔での便利です。

少し寄り道すれば古い町並みを見ることができます。

本陣跡① 本町本

池鯉鮒宿内には本陣は1軒、幕府の役人や公家・大名などが泊りました。

敷地299坪(約9583m²)、延坪300坪(約91m²)であったといわれています。また、西へ330mの所には、三河で唯一の哥創一對の里塙(県の指定)があり、同じく西へ1000mの所には、松並木(丁並木)の殊の弦街の中に「馬鹿之跳」と彫られた碑があります。

さらに西へ1500m進むと、江戸時代街道の宿場駅として栄えた東海道39番目の宿場町・本陣跡があり、その先には見事な橋樋門が構築した古城の跡もあります。

マシム井に有名な知立神社は、その北側の坂を下すところにあります。

片目の鰐

知立神社の御手洗池の鰐は、片目であったとい伝えられています。

その昔、長者の娘が重い病気にかかった上に、失明しそうになりました。娘の両親は大心配して、「娘の目がなおりますように」と明神さまに願かけし、来る日も来る日も心においてまいりました。

そしてむかつく湯鍋の二十一日の日、不思議などに娘の片目の目が見えるようになってしまったのです。

この時から、御手洗池の鰐は片目になったとい伝えられています。

山車(だし)(桟棒運の心意氣)

山車の構造は2層で、車輪は内輪で松の大木を輪切りにしたもので、形態は知多地方の山車に似ていますが、剥離(皮剥離)金箔を施し、剥離が後方だけにあるのが特徴です。

ある年、般舟の前で車輪が壊れ、桟棒運(右側4~5人が抱き上げたまま神社まで運行しました。これがはじまりとなり現在の山車の姿になったと言われています。

街角や神社境内で力を合わせて山車を抱き、山車内のはし連に合わせて方向転換したり、参道を一部引いたまま運行、神社境内でぐるぐる廻った後、「うち・の・さん」でドンと地盤に落とすのが、桟棒運の力の見せ場です。

知立まつり

知立市最大のお祭り「知立まつり」は、毎年5月2・3日に行われています。

本祭りには豪華な「山車」が、開幕には「花車」が、市内の山・中野・本・宝・西の五町から駆け出され、町内を練り歩き、本祭りでは国指定重要無形民俗文化財の「山車文楽」「山車からくり」が、知立神社・南雲波被神社で行われます。

この祭りは、田植えが始まる頃から、マムシなどの害蟲を除けたり、人々が神社に春雨を願ったことが起りと言われています。

神主・見立氏家御祖によると、初めて山車が奉納されたのは、江戸時代承応2年(1653)の祭礼であったと記録されています。

あんまき

知立市は、江戸時代「東海道三次」の宿場町、もめん市・馬鹿市で栄えました。そんな歴史ある知立の